オンライン SAC 支援体制の成果と課題からみえた今後への展望

Prospects for Future Development of Online SAC Activities

カンダボダ B. パラバート **Prabath B. Kanduboda**

立命館大学 Ritsumeikan University

kanda@fc.ritsumei.ac.jp

リュウ ソラヤ **Soraya Liu**

立命館大学 Ritsumeikan University

soraya@fc.ritsumei.ac.jp

著者について

カンダボダ B. パラバートの専門は，応用言語学と心理言語学で最近は，大学生の正課内外活動の調査もしている。現在は，びわこ草津キャンパスの自律学習支援センターで国際教育アドバイザー兼ファシリテーターとして活躍している。

ソラヤ・リュウの専門は，文化心理学である。びわこ・くさつキャンパスの講師として，自立学習支援センターで国際交流の活動を支援している。最近は，英語学習とアイデンティティ形成の関連について研究している。

これまで多くの自律学習支援センター（SAC）は，対面式（オンサイト）による支援体制を継承し，利用者の学びを支援してきた（Cladis et al., 2020，カンダボダ他，2020）。これらの取り組みはコロナ禍に伴い非対面式（オンライン）への切り替えを余儀なくされた。SAC オンライン支援について実践知を共有することは，今後の大学の SAC の発展における意義と役割が大きい。しかし，今回紹介する SAC 担当の教職員と学生は，今までオンラインツールを活用した正課外活動の支援はしていない。そのため，どのように SAC 活動を充実させるかが重要な課題である。

そこで本稿は，大学におけるオンライン SAC 体制について，活動にかかわった学生スタッフと教職員の取り組みを紹介し，その成果と課題を共有することで今後の発展に繋げたい。

オンラインによる事例紹介

SAC 環境

今回取り上げる SAC は，立命館大学のびわこ草津キャンパス（BKC）で提供される Beyond Borders Plaza（BBP）である。BKC は文理混合かつキャンパス領域が他キャンパスに比べて広く，年間利用者も同大学の他のキャンパスより比較的多い（Kanduboda, 2020）。BBP の支援活動は，大学側の教職員と学生スタッフが担い，主に，国内学生の海外留学の斡旋，留学生支援，国際交流の 3 種類の活動がある。これらでは，語学力向上講座や海外留学準備支援，日本語学習や日本国内での生活支援，国内学生と留学生の交流促進のイベントを実施し，国内外生の友達作り・文化交流・学術交流の発展を狙っている。

学生スタッフの特徴と活動

学生スタッフの特徴として，2 種類の形態（給与有り（Management Staff, MS），給与無し（Project Team，PT）が挙げられる。MS は，BBP 施設の利用を目的とする一般学生への支援を行うことで貢献する。PT は，イベントを主催し，例えば，留学支援，言語学習支援等の活動に貢献する。学生スタッフは，BKC 内で一般公募され，書類審査と面接審査を経て採用される。学生スタッフによって MS と PT を兼ねている者もあれば，どちらか一方のみの者もいる。これまで，文理系に加えて国内外の学部・院生がスタッフとして採用されている。全員の共通点として，い

ずれのグループもイベントの実施はあくまでも任意である点が挙げられる。2020 年度春期は，18 名（国内学生 15 人と留学生 3 人）の学生を PT として採用した（うち 1/3 は前の年からの継続者）。

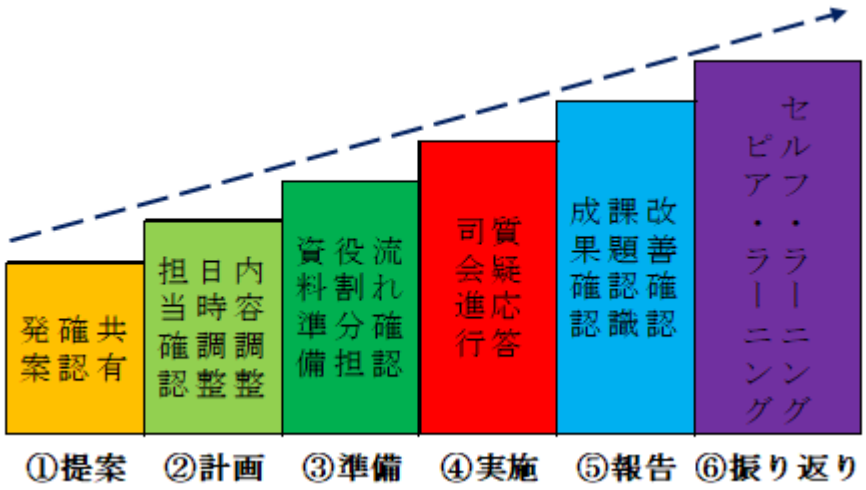
学生スタッフへのオンライン支援と活動実績

採用した学生スタッフ全体を BBP 経験のある先輩学生が率いる 5 つの班（新入生対象班，オンライン交流会班，留学相談と語学相談班，BBP 広報班，BBP-PT の共同作業班）に分けた。学生スタッフの中には，国内学生と留学生が混在していたため，日本語と英語を交えながら交流ができるよう支援した。また，学生スタッフ全体のリーダーを決め，班ごとにミーティングを行い，イベント開催のための準備を依頼し，イベントはすべてオンラインで開催した。

活動時に支障なく継続できるよう大学側がオンライン会議システムを確保した。先行研究（Kanduboda, 2020）でも報告されているが，オンサイトの取り組みでは学生スタッフに BBP 活動を通してアクティブラーニングとディープラーニングができる場を提供している。学生スタッフに，オンライン活動からも同様な学びができるよう工夫した。学生スタッフは，教職員が研修で共有した情報に基づいて各活動に参加し始めることでアクティブラーニングがスタートする。次に，彼らが個々の活動から得た知識を基に自らがプロジェクトやイベントを提案，計画，準備，実行することで一つの活動から得た知識をもう一つの活動に実践を通して応用することでディープラーニングに必要な力を磨いていく。教職員は BBP の学生スタッフのイベント主催において図 1 に示す内容で支援を実施し，1 段階から 6 段階までこなすことでアクティブラーニングからディープラーニングに必要な力を獲得できるよう準備した。なお，図 1 で示した 1 段階から 6 段階までの内容は，今までのオンサイト活動を背景に蓄積した教育的な項目である。今回は，同様の内容を用いてオンライン活動より学生の学びを検討することにした。

図 1

イベント主催における 6 段階の取り組み



なお，イベント開催前後で提出する書類（イベント書・実施報告書等）もオンラインツールを活用し，場所と時間の制約を受けず確認・提出ができるようにした。加えて，各段階において学生スタッフが随時相談することができる体制を整えた。大学側より 7 名の教職員（教員 2 名，職員 5 名）がサポート体制を検討した。BBP の大学側の支援体制は異なる課が担っている上に担当教職員全員が他の業務も兼任していたため，定期的に週 2 回の打ち合わせを通して BBP としての取り組み方，特に BBP 学生スタッフ支援，海外留学支援，留学生支援の 3 点に注目し，議論を進めた。BBP のイベントの広報では，学生スタッフは主に SNS を，職員は BBP ホームページと学内オンラインツールを，教員は授業を活用し，広報活動を行った。

BBP を担当する国際部国際教育推進機構の教員がインタカルチャラルアドバイザーとして，春期中毎週 7.5 時間程度の相談時間（BBP アワー）を設け，教育的な支援（ファシリテーターの練習，発表に関する助言，その他グループワークやリーダーシップ力に関する支援等）を行った。職員は，事務的な支援，例えば計画書や報告書の作成に当たる指導，広報用のチラシ作成と案内文作成の指導等を行った。

BBP は，オンサイトの取り組みでは多くの実績を残してきた。例えば，2018 年春期の実施企画全体は 93 件（学生主催 54 件，教職員主催 39 件）で参加者は 2060 人程度であった。しかし，2020 年度の春学期初めには，BBP 担当教職員は，実績がなかったオンラインの取り組みは何がどこまでできるかが何も予測できていなかった。にもかかわらず，BBP で開催したイベントは，語学系，海外留学

系，国際交流系等で，オンサイト活動と比較ができないものの今までなかったオンライン活動についても実績を残すことができた（図 2 に一部のイベントのチラシを添付）。春期の活動は，試行錯誤の末，合計 25 件に達し，すべてのイベントの参加人数は約 300 名に上った（うち学生主催イベントは 19 件，教職員主催イベントは 6 件）。

図 2

オンラインイベントのチラシ見本

オンライン活動における調査とデータ収集

2020 年度春期の BBP 活動の重要なキーワードとして挙げられるのは，“とりあえずやってみる”である（職員による提案）。今回，オンライン活動領域の不透明性（例えば，オンラインでどのような活動ができるか，参加者は本当に集まるか等）が大学側の懸念事項であったが，結果的に教職員の期待以上の成果が得られた。

そこで，学生スタッフのオンライン活動に対する意識を確認するために調査を実施した。学生スタッフへの調査は，オンラインツールを活用して任意かつ匿名での回答を依頼した（18 名中 15 名が回答）。

学生スタッフへの質問内容は，全体的な振り返り（PT の活動を通して学ん

だもの，感じた課題・問題点，全体的な満足度）と今後への気付き（活動を通して得た経験や力の中で今後最も役立つもの，今後も PT の活動を続けたいか，その理由，今後の PT 活動に関する提案）の 2 側面から設けた。なお，満足度に関しては，5 点満点とし，それ以外の質問の回答は全て記述式とした。アンケート回答は，春学期の全体的な振り返り会にて学生スタッフと教職員で共有した。

振り返り：学生スタッフの成果と課題

春学期の活動に貢献した学生スタッフの満足度は，5 点満点中 3.29 点（標準偏差 1.07）であった。先行研究（Kanduboda, 2020）で報告されているオンサイト取り組みにおける満足度（4.11）より下回っているが，オンラインによる初の試みとして学生スタッフの満足度が 6 割を超えたことは，今回の活動に関する支援体制によって一定の成果が得られたといえる。

次に，学生スタッフの成果として“コミュニケーションスキル，企画実施のノウハウ，情報交換の大切さ，組織運営力，異文化交流企画力”等獲得した。一方，課題として“オンライン企画のノウハウ，企画の段取り，個人負担の調整と共有，コミュニケーショントラブル，情報共有，時間管理”等が挙げられた。また，活動を通して得た経験やスキルの中で今後最も役立つと思うものは，“臨機応変に対応する力，ファシリテーション力，積極性，国際交流のノウハウ，時間管理，オンラインイベント力，チームワークとコミュニケーション力”であることが分かった。さらに，回答者 15 名中 14 名が今後の活動継続の意思を示した。その理由として，“今後はオンサイト活動に挑戦したい，挑戦の機会と達成感を得られるから，交流が楽しいから，経験を蓄積したい，自己成長に繋げたい，視野が広がる，友達作りや国際交流ができる”等が挙げられた。加えて，今後の活動における意見として“イベント実施を選択可能にすること，参加者募集に必要な段取り作りの支援，キャンパスを跨いで利用する学生と運営する学生の交流，徹底した学生スタッフ間の情報共有の促進，複数企画を実施する際にオンラインイベントの URL を統一することで混乱を避けられる”等が提案された。

教職員の取り組みにおける成果と課題

BBP 担当の教職員における今回の一連の取り組みから最も得られた成果と

して，オンライン活動を基に学生スタッフへの支援ができたことと教職員側でもイベントの開催ができたことが挙げられる。教職員にとってもオンラインツールを活用した正課外活動の支援は初の試みであった。そのため，どのように学生スタッフへの支援，特に教育的な狙いをもって活動を充実させるかが大きな問題であった。しかし，毎週の会議を設定することで，教職員間の情報共有ができ，学生スタッフへの支援体制も徐々に強化することができた。教職員の定期的な会議は非常に重要な役割を果たした。一方，いかに効率よく情報共有をするかや，教職員の間で一定の役割分担がある中の一個人への過剰負担など，課題も残る。これらの点は今後も検討し，改善を試みる必要がある。

とりわけ，今回の取り組みにより BBP の支援活動において新たなノウハウを蓄積することができた。今後は，継続が予想されるコロナ禍に伴ったオンライン支援体制を強化することが求められる。一方，ポストコロナ時代への対応も整えることが重要である。そのために，2020 年 2 月辺りまで実施し，確立させたオンサイト支援体制と 2020 年 3 月以降に新しく蓄積したオンライン支援体制両方のノウハウの結合が重要であると提唱したい。

オンラインとオンサイト支援体制を混合したハイブリッド型 SAC

今日まで大学が学生のために行ってきた正課外活動は，大きくオンサイトとオンラインによるものから成っており，二つの支援様式にはそれぞれの長所と短所がある。今回行ったオンライン支援は，オンラインツール（ネット環境，パソコン，マイク，カメラ等）が整備できれば即座に取り組むことができる。特に施設利用を伴わないので施設予約の競争もなくなる。加えて，対人コミュニケーションが苦手な人でも（事前相談の上）音声通話のみにて相談を受けることもできる。さらに，授業，研究，進学，就活等を背景に会場への移動が困難な場合，別の場所から参加することができる。しかし，オンラインツールを完備するための費用によって学生個人への負担が生じる可能性がある。また，オンラインツールの障害（ネット環境や電子機器の不具合等）によって交流に支障がでることも予測される。加え

て，個人や学内情報扱いの注意やオンラインで活動を行う際に増加する URL 数による問題点も考慮する必要がある。

ポストコロナでは，様々な工夫を凝らすことによってオンサイトとオンラインの長所を有効に活用することができると考えられる。例えば，学生個人の相談（言語学習，海外留学，進学等）をどの様式で受けるか学生自身で選択肢を設けることができる。また，イベント開催もオンサイトとオンラインのどちらでも参加可能にすることで参加人数の増加が見込める。特に，日時と場所が重複するイベントがあった場合，内容によって開催方法を選択可能にすることで参加学生又は主催者の学生が希望する日時で開催することの可能性が大幅に高まる。このように，オンサイトとオンラインを結合することによる可能性の拡大が期待できる。

加えて，教職員にとっても選択肢が増えることで適宜予定調整することが可能となる。例えば，筆者は今まで BBP 施設で国際教育推進の一環として，主に国内学生の相談や活動に携わっており，オンサイトにて実施していたため，学生が所属するキャンパスの BBP 施設に赴いて行っていた。これらをオンラインで実施することが可能であれば，より効率よく業務が遂行できたといえる。また，異なるキャンパスで同様な取り組みに関わっている教職員の打ち合わせにおいても，オンライン会議システムを導入することで情報共有がより円滑に行えるようになる。

まとめ

本論では，日本国内の大学環境における正課外活動の実態についてオンライン支援体制を中心に 2020 年春期に行った学生スタッフと教職員の実践知を共有した。春学期の活動において学生スタッフは，オンライン上でイベントを開催したことで，新たな気付きや学びを得た。また，オンライン活動を通して得られる成果と課題が明らかになったほか，教職員の取り組みからも貴重な知見が得られた。

次期の社会状況を鑑みて，オンライン支援のノウハウを確立させるためにも継続的な活動と支援体制の強化が不可欠である。さらに，ポストコロナの大学環境

における正課外活動の支援では，オンサイトとオンラインを混合することにより効率的かつ効果的な支援を提供することで大学生の学びの過程に大いに貢献できる。そのため，今回のオンライン活動実績と従来のオンサイト活動実績のノウハウを混合することも視野に入れる必要がある。

謝辞

本稿の報告において，BBP 学生スタッフから振り返りデータを提供していただいた。また，担当した教職員より取り組みの知見と内容作成においてもお力添えいただいた。改めて感謝を申し上げる。

参考文献

Cladis, C. M., Eades, J., Tachibana, M., & Worth, A. (2020). From zero to hero: The story of a free conversation service. *JASAL Journal*, *1*(1), 129–138. https://jasalorg.com/journal-june20-cladis-eades-tachibana-worth/

Kanduboda, B. P. (2020). From Active Learning to Deep Learning: Supporting Socialization and Autonomous Engagement via SAC Staff Duties. *JASAL Journal*, *1*(2), 44–62. https://jasalorg.com/kanduboda-supporting-socialization/

カンダボダ P.B・石川涼子・筆内美砂・村山かなえ・羽谷沙織. (2020).「大学内における学生の正課外活動への支援体制と課題 - BBP での実践を題材に-」『立命館高等教育研究』*20*, 115–136. http://www.ritsumei.ac.jp/itl/assets/file/publication/kiyo/kiyo20.pdf